

「令和6年度 全国学力・学習状況調査」の結果について

【富里市立 富里中学校】

令和6年4月18日（木）に、小学校第6学年全児童、中学校第3学年全生徒を対象として、「全国学力・学習状況調査」が実施されました。本校の中学校の結果についてお知らせします。

1 生徒が受けた調査について

「国語」、「数学」、「生徒に対する質問紙調査」の調査が実施されました。それぞれの内容は下記のとおりです。

教科に関する調査

- （1）①身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
②知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

※出題範囲：原則として調査する学年の前学年までに含まれる指導事項

質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

※調査問題は「国立教育政策研究所」のHPで閲覧できます。

<http://www.nier.go.jp/24chousa/24chousa.htm>

2 本校生徒の調査結果

本校生徒の調査結果及び分析は以下のとおりです。

（1）教科の正答率について 〔※ 全国公立中学校の平均正答率（以下全国平均）との比較〕

国 語	学習指導要領に示されている〔知識及び技能〕、〔思考力、判断力、表現力等〕の内容に基づき、全体を視野に入れながら中心的に取り上げるものを精選して出題	C
数 学	学習指導要領における、「数と式」、「図形」、「関数」、「データの活用」の各領域に示された指導内容からバランスよく出題	C

☆ 全国平均正答率との比較について

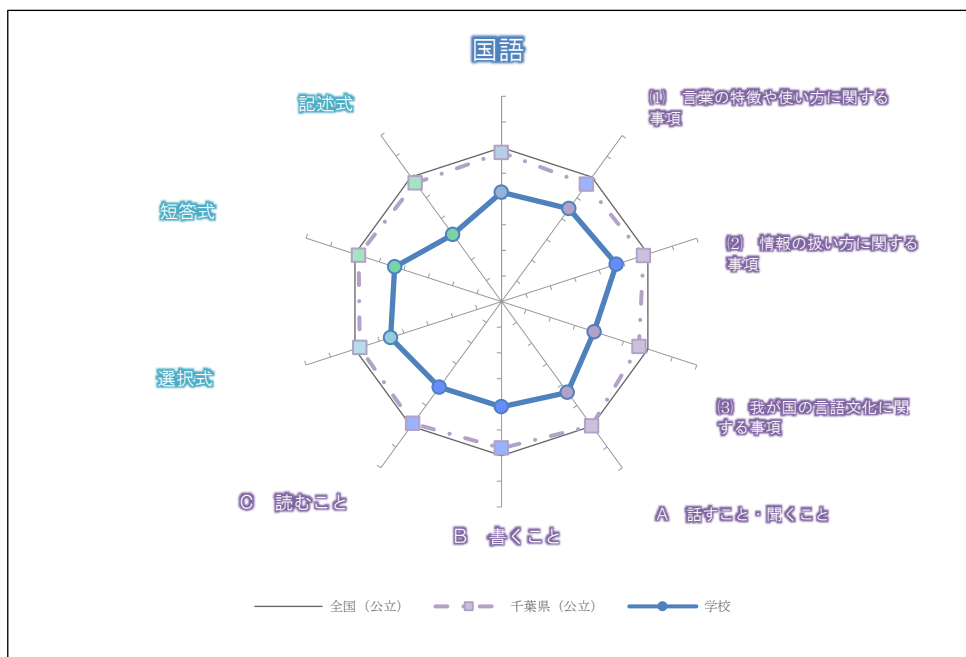
A：＋5.0％より上回っている場合「良好」

B：＋5.0％～－5.0の場合「ほぼ同じ」

C：－5.0％より下回っている場合「要改善」

(2) 教科ごとの分析

国 語



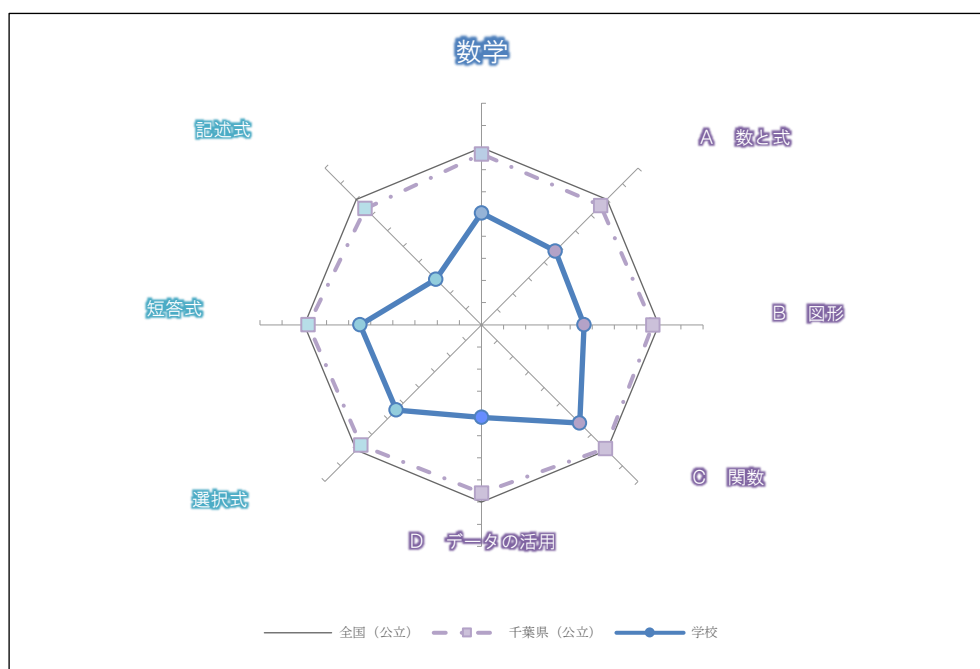
【特徴と現状】

- ・本校と全国平均を比較において、本校の正答率は全国平均よりも－10 ポイント低い結果でした。
- ・特に「我が国の言語文化に関する事項」が－17 ポイントと著しく低い結果でした。さらに、「B かくこと」の正答率と記述式の正答率が共に－13 ポイントでした。問題別調査結果からも「無回答」の割合が全国平均よりも高く、特に自分の考えを表現する設問になると、無回答率が顕著になっている傾向にあります。
- ・授業などの ICT 化により、キーボードに打ち込む機会が増えた結果、逆に書くことの機会が減少したこともこれらの結果を支援しています。
- ・以上のことから、本校の生徒は、自己の思考を「話す書く」などで言語化して表現することを苦手とする傾向にある生徒が多くいることがわかります。

【改善方策等】

- ・記述式の対策として、基礎知識の習得や漢字の小テスト、意味調べなどを系統的に実施します。
- ・文章の内容を捉える力は比較的定着しつつあるようなので、構成や展開の流れを意識し、文章の要約に取り組んでいきます。
- ・「学び合い学習」の中で、自分の考えを発表する機会を増やし、概要を明確にして伝えたり、書いたりできるように指導を行います。
- ・授業のまとめに振り返りとして、学習した内容を文章でまとめることを継続して指導します。
- ・本校では、各生徒が各自でノートを準備して家庭学習を行っているが、国語を自学で行う生徒は比較的少なく、行っているとしても漢字やワークが中心です。読み取りは比較的得意とする一方、自分の意見を書く話すなどで表現することを苦手としている生徒が多くいるため、授業中を中心に表現活動を行い、書くなどの力を養っていきます。

数 学



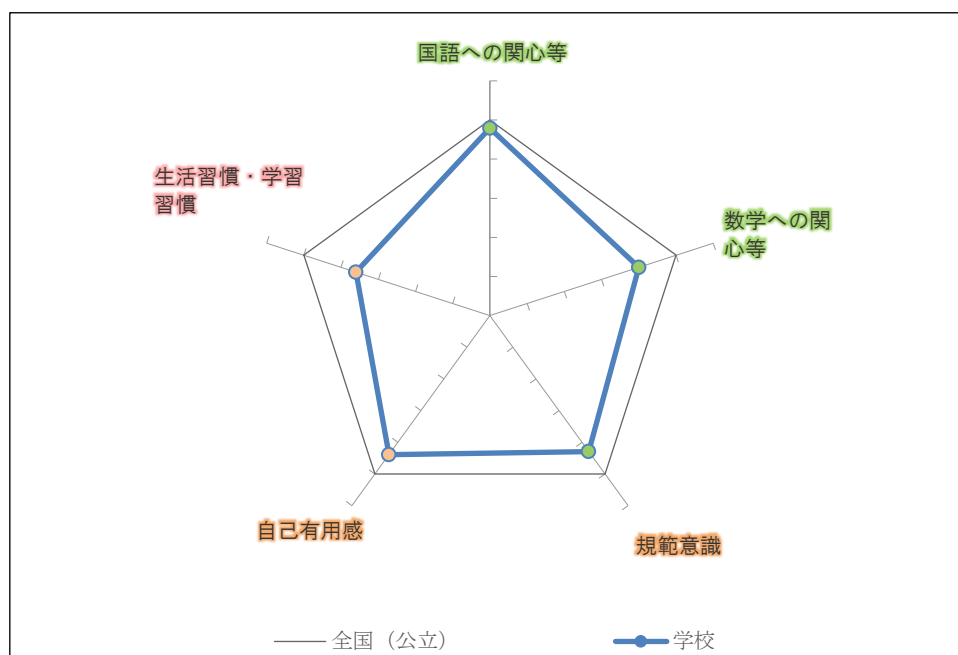
【特徴と現状】

- ・全国平均よりも、全体的に－15 ポイント低い結果でした。
- ・「関数」は例年の水準を保っているものの、「データの活用」の分野で－21 ポイントと著しく低い結果でした。
- ・系統だって指導できる「関数」に対し、データの活用では復習不足が数値を下げる要因となりました。
- ・問題別調査結果の誤答の内訳は、純粋な誤答の割合よりも「無解答」が多く、設問において上回っており、(数 1)の質問の回答に「解答を諦めてしまうことがあった」というが 5 割を超えていました。
- ・以上のことから、数学の基礎計算力の不足が挙げられ、さらに文章を理解し、問題の意図を把握する力とその解答を導き出す力の育成が課題であることがわかりました。

【改善方策等】

- ・基礎基本の定着を確実にを行うため、基礎的な計算ドリルを繰り返し行います。
- ・少人数学習の利点を生かし、きめ細やかで的確な指導を行い、確実な理解を深めさせます。
- ・中学校入学時で、算数にかなりの苦手意識を抱えている生徒が多くいます。この苦手意識を改善するだけでも数学科は大変な労力を要します。算数に苦手意識がある生徒は、数学だけでなく他教科の計算分野でも負の影響を及ぼすところが考えられ、生徒本人たちも苦手意識が強まる負の相関関係にあるようです。小学校と連携を図り、九九や四則計算の定着の呼びかけを協力して行っています。
- ・基礎学力の定着のみならず、学習した内容を使って問題を解くような応用問題にたくさん取り組む機会を多く設けていきます。基礎を学び、基礎を使うことで学力の定着を図ります。

(3) 生徒に対する質問紙調査の結果及び分析



【特徴と現状】

- ・教科が「好き」と答える割合は、全国平均と比較して各教科で高い傾向にある。授業の内容がよくわかるの回答率は数学においてやや低い傾向にあります。
- ・本校の生徒は無回答の割合が高く、特に数学では、解答を諦めてしまうことがあったという割合が5割を超えています。
- ・本校では、平日に3時間以上勉強する生徒の割合が1割以下にとどまり、0～1時間の生徒が5割、土日になるとそれがより顕著となっています。
- ・本校では、数学に抵抗感のある生徒が多くいる現状があり、かつ家庭での学習習慣に課題がある傾向にあります。

3 まとめ

- ・今回の調査では、国語においては教科「好き」という回答と、「授業がわかる」という回答は、全国平均と同程度でしたが、数学においては下回っています。
- ・本校生徒は、学校での授業への取り組みは自己評価も高く、実際の取り組みは素晴らしいものですが、自主学習となると平日に3時間以上学習している生徒は1割以下しかおらず、5割は0～1時間の学習時間であることがわかりました。
- ・今回の教科はいずれも全国平均を下回る結果となり、各教科で改善が必要です。国語では、自分の考えを「書く」等で自分を表現すること、数学では計算力と答えを導き出す力、が課題となりました。各教科で共通していえることは、自己表現力の育成であり、育成の過程で培われる思考が、「この問題は、あの考え方に似ているな。もしかしたらあと少しで解けるかも？」という思考を育み「あきらめず、答えを導くこと」につながります。
- ・本校では、今回の調査を鑑み、管理職・教務・研究主任・各教科主任と連携を図り、授業や自主学習の改善に取り組み、学力向上を図ります。